

第27回 河内長野市文化振興計画推進委員会 議事録

【日時】平成23年12月15日（木）午後7時30分～午後9時45分

【場所】市役所5階 501会議室

【出席者】

〈河内長野市文化振興計画推進委員会委員〉

谷 悟・千原 喜美・魚返 普子・川上 勝・小西 朋子・白井 春夫・寶楽 陸寛・
松村 千恵子・南 美鈴・山田 淳子・渡辺 正直

〈事務局（河内長野市教育委員会事務局ふるさと文化課）〉

井上・東畑・廣中

〈オブザーバー（公益財団法人河内長野市文化振興財団）〉

萬木・大久保

【配布資料】

- ・第27回河内長野市文化振興計画推進委員会次第
- ・資料1 第26回河内長野市文化振興計画推進委員会次第
- ・資料2 文化振興計画概要版抜粋
- ・ラブリーニュース
- ・ラブリーホール各種公演チラシ

以上

井上課長

本日の案件としましては、委員会での検討テーマの設定ということで、本日検討していただくことにより、今後の方向性等がでてくると思います。何かといろいろなご意見をいただきながら進めてまいりたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

谷委員長

今回の案件は、委員会での検討テーマの設定についてです。私が委員長に就任してから既存施設の見学を中心に回を重ねてきた。前委員長はアートセンターなどの拠点づくりを提案されたが、市にこの委員会が移管されたときに、もう一度この委員会の役割を問われた。進捗のチェック・評価をしていくのがこの委員会の役割ですが、財政的にも厳しく、具体的なことがされていないので、それらをするのは難しい。私たちの役割は何かということについて、この資料（文化振興計画概要版）を見ていただきたい。この冊子を見たときに、5、6 ページが重要であると思える。この委員会はある種ひとつの指針を作り上げていくものであり、それは、より具体的な方がいいのですが、何から手を付けていけばいいのか、優先順位をみなさんと協議していきたい。どこの場所でも通用するものではなく、河内長野市独自のものであるということがポイントであると思う。

山田委員

河内長野には多くの地域資源がある。高野街道や高向玄理といった歴史的な地域資源、奥河内の自然的な地域資源。これらを、責任をもって推進していくべきだと思う。

白井委員

文化、歴史といってもまずは関心を持ってもらう必要がある。そこで、文化・歴史と観光のコラボレーションが必要であると考えます。

谷委員長

文化と観光のコラボレーションというキーワードに関してですが、市には観光に関する部署はありますか。

井上課長

商工観光課と産業活性化室があります。そちらのほうで奥河内構想の取り組みをしています。文化につきましては、文化財の保存だけでなく、文化財をどう活かすかということに補助金もでるようになってきています。

谷委員長

文化の垣根をあまり高いところに置かず、多くの人に魅力を認識してもらうために観光と

いうのは重要であり、文化と観光のコラボレーションというのは本日の大きなキーワードであると思う。また、それぞれの関連の課と勉強会などを設けると、より具体的に動くことができるのではないだろうか。予算計上についても課を跨った形で出来るようになるかもしれない。その方向性を当委員会で審議していくと現実的な方向性が見えてくるのではないか。

魚返委員

教育関係ともコラボレーションし、ふるさと学など、河内長野らしさを活かしていければいいのではないかと思う。

松村委員

日野の獅子舞・観心寺・金剛寺など、河内長野には伝統的なすばらしいものが多くある。これらと観光をどう繋げていくか、どう光を当てるのかが鍵となってくると思う。

川上委員

委員の皆様はそれぞれのフィールドでご活躍されているが、この委員会で考えたことを各フィールドに持ち帰っているのかという確認、持って帰ったものがどのように活用されているのかということを確認しなくてはならない。第一次の答申案では市から、市民とかけ離れた答申案であったという答えがあったが、考えている我々が市民である以上、市民とかけ離れているはずがない。それを成果として立証されていない。そこが問題であると思った。委員会で話したことを各フィールドに持ち帰り、反映されているということ、もしくは反対されているということ。そういった成果の抑えをしていないのではないだろうか。それを解決しなければこの委員会は文化を推進させることはできない。

小西委員

京都や岡山の小学校へ指導しに行くが、河内長野ではそういうことがない。どう広げて行けばよいのかと思っている。

谷委員長

市民の方とアーティストの回路、チャンネルを作りたい。繋がるようなツールを作ることが大事だと思う。

川上委員

この委員会自体がプロデュース機能を持つてもいいと思う。委員の方々がそれぞれプロデューサーであるべきではないか。反対されようが、やれると思ったことは口に出し、まずは動きをつける。委員のみなさんがそうすることによって何パターンもの組み合わせがあ

る。委員会がプロデュース機能を持てば素晴らしいことになると思う。

松村委員

市制60周年にこのメンバーで何かするのを考えてはどうか。

谷委員長

方向性をつくっていくということは非常に観念的で抽象的な作業であり、達成感やリアリティがないかもしれない。指針を作ったところで、どういうシステムで、誰に投げかけたらいいいのか、財源はどうなるのかということも考えなければならぬ。これまで施設を回ってきたが、次は、NPOや文化連盟、若い人達、財団の職員といった「人」をキーワードとして、お会いし、勉強していく必要があると思う。イベントを上げるのもいいと思うが、「既存」というキーワードも大事だと思う。そういう人達と勉強会をしていくことによって何か生まれてくるのではないだろうか。また、私たちは、そういう人と会ったときに何を語ればいいのかということはこの委員会で考えていく必要があるのではないか。

寶楽委員

システムや方向性を構築するのがこの場であると思っている。市から委託されているのだから、ある程度公的な場であるべきである。だから、ここがプロデュースして何か作ってしまうと、せっかく芽がでてきたところに、公的なものが手を出して潰してしまう可能性があるのではないか。

今文化に携わっている人は頭打ちの状態であると思う。場やお金がなくなってくる、後世が育たない、などの問題があると思う。そこに対して河内長野の方向性を考えるのがこの委員会であると思う。観光と文化をテーマにどう考えていくかが大事だと思う。また、それに対して市がどう考えているか政策提言をするのが必要だと思う。

この委員会がプロデュースするよりも、プロデュースできる人を育てることが、大きな方向性の中で必要ではないか。

川上委員

スキルアップしていくという作業が欠落している。文化という切り口で考えれば、表現する側も見る側もスキルアップしていかななくてはならない。表現する側を批判する観客がいなければその団体は研ぎ澄まされない。その関係を保とうとしない人が多い。

寶楽委員

スキルアップすることは大切であるが、見てもらえないものがスキルアップしても意味がない。認知してもらうことが先である。見られる場を設定するための、人をマッチングする仕組みをつくる必要がある。

川上委員

何かを見て面白いと感じた人が、面白いと広める活動が必要である。そして、表現する側により向上するように要求しなければならない。それをどこで、誰が、どれだけするのかということ繰り返していかなければ文化は廃れる。そのことに気付いた人が身を投じていけばいい。

寶楽委員

身を投じていく場というのは、地縁的な関係に基づく文化である場合が多く、閉鎖的であると感じている。断絶された何かを繋ぐ場がなければならない。考え方によっては、廃れていく文化というのはそれまでのものであり、廃れても仕方がない。しかし、それでも残したい文化があるなら、断絶したものを繋ぐという仕組みを作らなくてはならない。

川上委員

最も重要なのは、音楽が分からず、譜面がかけなくても、良いと感じたことは良いと言うことであると思う。誰かにそれを伝える責任がある。演奏者は聴く人に良いと認めてもらう努力をする必要がある。その関係がうまく成立した時に良いコンサートとなる。その繰り返しでしかないと思う。それは、伝統文化であろうが、新しい文化であろうが、同じことである。良い、もしくは悪いと感じたら、それを周囲に伝えることで、改革することも、成長させることも、潰すこともできる。精神的な豊かさを与えるのは文化以外ない。それが文化というものが非常に大事な理由であり、誰が、いつ、どこで、どのようにということを考えて話をしていく作業をあちこちでなくてはならない。

若い人たちが河内長野で楽しむということは、機会が少ない。カッコいいふりをできる場所がない。その場所をわれわれが作らないといけないのかなと思う。若い人たちが関わっていけるステージを作っていく努力をしようと思っている。

寶楽委員

場をつくっていくなかで、既存のものを活かすというのがキーワードであり、例えば、文化連盟の文化祭に若い人のロックバンドが参加するなども考えられる。プロデュースやディレクションをするというのは専門的であり、抛り所が必要である。そこで、ラブリーホールに河内長野の文化がすべて集まると言い切ればいいのか。河内長野モデルとして、文化のセンターはラブリーホールという既存の施設に集まるようにするという答申を書けばいいと思う。文化というものに何か縦割りの部分があり、公的な横串をさせるものが必要であると思う。

川上委員

河内長野で何かしようとなると顔がさす。若い人達にとってはそれが心地よくない。それは心地よい人間関係をつくらなくてはならない。そのための方法を探らなくてはならない。

寶楽委員

だからこそ、語れる人を育成しなければならない。一般の方は文化に対しての一步を踏み出せない。その一步を踏み出せる仕組みを作らなくてはならない。企画を考える人は自分たちのフィールドを超えておらず、誰かがそこに横串を刺さなくてはならないのではないかと思う。

川上委員

企画するにもしっかりと目利きをし、それを河内長野に持ってくることで何を提供しているのかということを吟味し、探りながら話し合っていく委員会はいいが、言いつばなしの委員会になってはいけない。

寶楽委員

議論の場と、客観的に方向性を示す場を分けるべきである。ここは方向性を示す場であり、絶対に動いてはいけないと思う。そうでないと、ひとつの実行団体になってしまう。だから、活動・行動と理念というのは両輪であり二つがあって初めて動くのだと思う。そして今、理念がない状態になっており、横に繋がっていないのであると思う。

川上委員

それぞれの団体やジャンルには理念はあると思う。しかし、それをお互いが認め合うだけ主張していない。

寶楽委員

主張していないというよりは、衝突を避けているように感じる。

川上委員

この委員会で、先陣を切ってやる人はやればいい。そして、そうでない人は、誰かを指名して動いてもらえばいいのではないか。とにかく第一回目の意思を投げるということがこの委員会の委員であっていいのではないか。

寶楽委員

一回目の意思を投げるのであれば、投げるための裏付けをとらないと一発のイベントになってしまうと思う。

川上委員

裏付けというのは、投げられる方の論理を理解しろということか。

寶楽委員

実行も大事だが、実行の裏付けは、こんな課題があるからこれが出てきたというのが答申とか方針であると思っている。

川上委員

理念は大切である。しかし動ける人間は動いてもいいのではないか。

寶楽委員

動ける人が動きやすい仕組みがあると発信するのが大事である。1つの動きを100にするには仕組みが重要であり、それがなければ長続きもしない。その仕組みについて話し合わなくては、この振興計画は何も残らないという恐れがある。

川上委員

仕組みというのは動いていく中で整理されていく。動かずに、はじめから全て仕組みを考えるということは不可能である。

寶楽委員

貫いた理念がなければならない。

川上委員

その理念を見出すためにこの委員会に人が集まっている。しかし、全ての理念を確立することはできない。

松村委員

実際に動いてわかるということもあるのではないか。

寶楽委員

実際に動いてわかるというやり方では行政は動かない。行政が、我々が求めている方向へと進むための施策の基礎を話し合う場であると思う。この議論の方向性は市民に向かって発信するものなのか、行政に向かって発信するものかによって変わってくる。方向性はどこに向かっているのかを話し合わなければならない。

川上委員

その方向性を示して行政へ向けて発信するというのではないだろうか。市民へ向けるのではない。行政の担当課が納得する施策のたたき台をここで叩けということを行っているのか。

寶楽委員

政策提言ということである。市が動きやすい仕組みを作りつつ、市民が動きやすい仕組みを作らなくてはならない。そうでないと長く続くものにならないのではないか。

川上委員

政策提言という方向で行くのであればこの委員会の方向性は変わってくると思う。政策提言でいくのか、それ以外にするのかを考えようということが良いのか。

谷委員長

前委員長がされたのは政策提言であり、結果は厳しかった。こういう所で、これくらいの予算規模で出来ると示すことも必要であったのではないかと思う。

次回開催予定 3月29日（木）市役所501会議室